すなっぷ

さりげないスナップ写真のすてきな笑顔のように
群馬の教育や文化の話題を、ふだん着のままで紹介するシリーズ

第18回まついだ夢伝 2010年10月17日（日）

夢に向かってGO！

安中市松井田商店街住民とボランティアが障がい者とともに走る

「ゆめでん」というネーミングがすばらしい。目的は、「走る、歩く、電動車椅子で、車椅子の手こぎ、足こぎで、自分の持てる技と力でみんなとゴールにむかって、精一杯がんばる」「より良く生きるという夢を自分の中に育て、そして他へ伝える」こと、と要項にうたわれている。主催者は「まついだ夢伝実行委員会」。18 年前に始まったときの松井田町は安中市に合併されたが、市民が実行委員会を構成することは昔から変わらない。当日の運営が３００人あまりのボランティアの手に委ねられていることもこのイベントの特色。秋盛んな１０月中旬、妙義山を背に立つ安中市松井田支所の開会式会場に行ってみた。アトラクションに続いていよいよスタート！

熱気感じるスタート

１０時、スタートの合図とともに「ウォーク」参加者が歩き始める。「ウォーク」とはいえ、スピードは人それぞれに異なる。走り出さんばかりの勢いで先頭争いをする人たちに遅れて、介助者に腕を支えられている人や、まるで散歩気分のような参加者が歩き出す。これはレースのようでいてレースではない。決してのんびりとした感じではない。むしろ参加者のじっとりとした熱気を感じる。

コースは中山道松井田宿

スタート地点は安中市役所松井田支所前広場。東西に長くのびる宿場町のメインストリートの西端近くから２００メートルほど南に入ったところ。コースはここからメインストリートに進み、広い通りを１．５ｋｍほど下る。所々に古い二階建て木造家屋があり、宿場町として賑わったころをしのばせる。今もにぎやかな仲町商店街で折り返し、スタート地点に戻る。全長４ｋｍ。マラソンコースとしては長くはないが、運動不足の私にとってはちょうど良い散歩コース。みな、心地よい汗をかいて休日のひとときを過ごすのだろうと予想したが実は様々なドラマが待っていた。まさに夢伝。

はやくもギブアップ？

１０時にスタートしたのは「ウォーク」参加者。５分後に「電動車いす」、また５分後に「車いす」、その１０分後に最後の「マラソン」参加者がスタートした。私はウォークの人たちと歩き始めたが、やがて電動車いすや車いすグループに追いつかれ、マラソンランナーたちにはあっさりと追い抜かれた。

宿場町の面影を残す古風な家屋を眺めながら歩いていたとき、私の前をゆく若い女性が歩くのをやめ、だだをこねるように路面に座り込んでしまった。彼女はもともと歩行が不自由に見える。もう一人の男性参加者とその介助者との４人グループで歩き出していた。２名の介助者が両脇を抱えてここまで歩いてきたのだが、疲れてしまったのだろうか。折り返し地点はまだ遠い。介助者はどう支援するのだろう。しかし介助する二人にあわてた様子はない。急かせることもしない。にこにこしながらそばに立っている。あるいは一緒にしゃがみ込む。「大変だなあ！」と私は心の中でつぶやいている。

やがて介助者が「さあ、行こうか」と言って脇を抱えるようにして促すと彼女は素直に立ち上がり、再び歩き出した。時間がゆっくりと流れている。私の胸はどきどきと高鳴って彼

らから目を離せない。

地域ぐるみのイベント

時計の針を逆戻りしてスタート前の松井田支所前広場に。事前に寺島伸二実行委員長に取材を申し込んだところ､｢参加者としてきてください」との返事。そこで支所入り口の受付で１０００円を払って参加を申し込んだ。
種目は①ウォーク②電動車椅子③車椅子④マラソン。私はウォークを選択。おみやげとおにぎり、お茶をいただいた。

広場にはテントがたくさん張られ、そこではキノコ､里芋､コンニャクなどの地域の産物や、手作りクッキー、パンなどが販売されている。上州名物焼きまんじゅう、金魚など、まるで縁日のようなにぎわい。女性たちがけんちん汁に煮込む野菜を刻んでいる。

高校生ボランティア

このイベントに地元松井田高校のボランティアサークルが毎回参加している。今年は２年生の修学旅行と日程が重なったために参加者が少ないとのことだが、テントを張って、自分たちで作った栞を配布していた。高校生は子どもの相手がじょうずだ。放送係として参加している生徒もいるとのこと。

安中総合学園高校の福祉科の生徒は伴走者としても参加している。そして吹奏楽部員は開会式と閉会式を大いに盛り上げてくれた。

折り返し地点

車椅子集団が折り返し地点に近づく頃、マラソン集団が次々と駆け抜けて行く。いっしょに取材にきたフォーラム運営委員の平井敏久さんも伴走者として参加している。若い頃、陸上部員としてならした彼は夢見るような余裕満々の表情で走り去った。

先ほどの道路にしゃがみ込んでしまった女性がまたまたストップ。今度は簡単に起きあがろうとしない。疲労がかなりたまったようだ。悲鳴に似た声も聞こえる。ギブアップかな、と思った時、道ばたの住民から「がんばって」の声が次々とかかる。それが本人に届くことを期待して私は先に進んだ。

まゆみさんは人気者

車椅子の女性が折り返し地点を通過したところで介助者に何か伝えようとしている。しかし彼女は声を出すことができない。顔をゆがめながらしきりに何かを伝えようとしている。乗っている車椅子から立とうとしている。状況をのみこんだ介助者が「歩くの」と聞くと彼女はうなずいた。「まゆみさん（仮名）」と呼ばれた彼女は介助者の手を借りて車椅子から立つと車椅子を押しながら歩き始めた。私は「すごい！」と感嘆の声をあげた。

しばらく進むと道ばたの住民から声がかかった。「まゆみちゃん、がんばれ」「まゆみちゃん、自分で歩いてえらいね」と。彼女はどうやら夢伝の常連で人気者らしい。応援の女性たちが言う。「まゆみちゃんは作業所の手芸教室でもがんばってる。」「昔は車の運転もしてたんだよね。」

介助者の上原さんも感激

まゆみさんの介助者は上原さんという。自分自身は地域のクラブに加入して時折ランニングしている。自分の経験を生かして夢伝のお手伝いをしたいと思ってボランティアを志願した。まゆみさんと会うのは今日が初めて。面識はなかった。だから折り返し地点で歩きたいと言われて彼女もビックリしたそうだ。「私の何か教えられているような気がします」とつぶやきながらまゆみさんの横を歩く。

今年も咲いていた菊

やがてまゆみさんがまた何かを伝えたい様子で上原さんに向かって訴える。車椅子に下げたバッグの中からカメラを出してほしいと仕草で伝える。まゆみさんが撮影したいものは前方の民家の庭にあった。民家の住民がまゆみさんを待っていたように手招きする。「また今年もきたね。」「ちょっと早いけれど咲いているよ」と言うご夫婦の後方には植木鉢に咲いた見事な菊の花。まゆみさんは夢伝に参加するたびにここの菊の前で写真を撮っているとのこと。上原さんと並んで私がシャッターを押した。住民が私に向かって「いっしょに撮りましょう」という。好意に甘えてハイチーズ。胸が熱くなる。まゆみさんは顔をくしゃくしゃにして喜びを表現する。今年も花の前で写真が撮れたことをこんなに素直に喜んでいる。

私の夢

障害者の生活は大変。彼らを支援する人たちの苦労も大変なもの。頭がさがります。私にできることがあったら何かしたい。と、そう思いながら、同時に、私自身がまゆみさんから何かをもらっているような気がしてなりませんでした。歩く速さは遅いけれどそのことがマイナスではない。季節の変化を楽しみ、人とのかかわりを大切にしようとする気持ちが人の生き方を輝かせる。そのことを私はまゆみさんから教わった気がする。人はみな支えあって生きていくものだという実感が湧いてきた。

社会の仕組みや生活環境はまだまだ障がい者にきびしいところが多い。菊を眺めながら、人の心の中も含めてバリアーフリーの社会が実現することを夢見た。

ボランティアの力はすごい！

私たちがゆっくりと花を愛でている間に、折り返し地点で立ち往生していた彼女が追いついてきた。表情がずいぶん穏やかになった。相変わらず両脇を抱えられているけれどもういやがる様子はない。そしてとうとう私たちを抜き去ってしまった。すごいことだ。短時間だけれど、今日の挑戦を通して彼女はとても大きな経験をしたのではないかと思う。

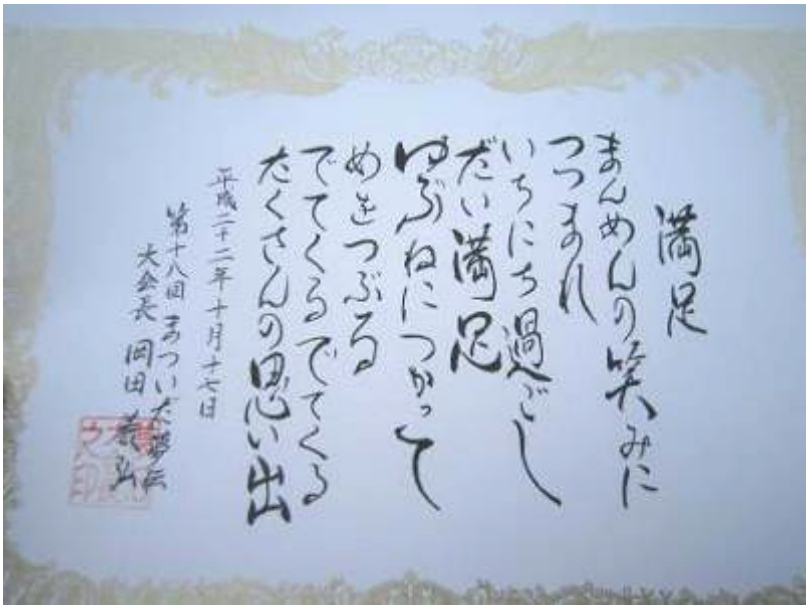
それにしても介助者もすごい。表情を変えずに淡々と付き添う姿に「強さ」を感じる。「共に生きる」という強い意思の強さのようでもある。彼らの力なしでこの夢伝はない。

ゴールテープ

まゆみさんは菊の前で写真を撮ったあと上原さんに支えられて車椅子に乗った。少し疲れたようだ。まゆみさんにとって「歩く」ことは大変な仕事だ。手足、全身を緊張させながら一歩一歩進む姿はまさに重労働だ。何がまゆみさんをこれほどまでに歩くことに駆り立てるのだろう。よほどこの夢伝が楽しみだったのに違いない。

そしてゴールが近づいた。するとまゆみさんは再び「車椅子から降りる」と訴える。なるほど。彼女はほとんどラストに近いけれど自分の力で車椅子を押しながらゴールテープを切った。まゆみさんの夢がかなった瞬間だ。私は心の中でまゆみさんと上原さんとの出会いに「ありがとう」と感謝の言葉を送った。

満足



満足
まんめんの笑みに
つつまれ
いちにち過ごし
だい満足
ゆぶねにつかって
めをつぶる
でてくるでてくる
たくさんの思い出

平成２２年１０月１７日
第１８回まついだ夢伝

完走者に完走証が渡される。私もいただいた。実行委員長作の完走証がユニークだ。

（文責：倉林）

実行委員として参加して

今までは交通係でしたが、今年は付き添いとして走ることができました。担当は聴覚障害をもつ小学生でした。もう一人の担当はお父さんか親戚の人のようでした。もう一人の担当者が遅れがちだったため、その小学生は何度も後戻りをしながら走っていました。これでは私の出る幕はないと思い、別の小学生と走りました。辺りを見回すと、手押しの車椅子、電動車椅子、松葉杖、歩く人、健常者、応援する人などが目に入ります。それぞれが楽しんでいます。障害者に付き添う高校生も真剣な眼差し、障害者はうれしそうです。勝敗に関係なくそれぞれが大会を満喫しています。私は色々なマラソン大会に出場してきましたが、このような大会は初めてでした。係りとして走ったのですが、満足感を味わうことができました。最後にゴールしたのは松葉杖の方でした。ありったけの力を振り絞ってゴールした姿は感動的でした。（平井　敏久）